



館長だより

山形県産業科学館

令和 6 年 5 月 26 日(日)

発行 館長 加藤 智一

経験を活かして未来へつなげる話

今、私の一日は、6時に起きて朝食を済ませ、7時にはコーヒー飲みながらテレビつけて、朝ドラ見たら新聞を読み、窓から外をボーと眺めて自転車に乗ってご出勤というのが、ルーティーンになっています。最近気が付いたことがあります。毎朝ボーと眺めている外の風景、その登場人物がほぼ同じ。まず上手から、犬に引き摺られるようにして若い男性登場。下手から走り込んでくる男子児童2名、続いて下手から自転車並列で登場する女子高生2名登場。続いてお向かいの女子中学生が上手にはけると、女子小学生が外に出てきて、下手から登場する別の女子児童と合流。さらに上手から女子高校生が徒歩で登場したら、自転車に乗った男子高校生が上手から下手に結構なスピードで駆け抜けるといった具合。ほぼ毎日同じ。考えてみたら、電車で米沢まで通勤していた時も、同じ人達が同じ電車の同じ席に座っていました。おそらくですが、多くの方は、同じ行動を無意識のうちにする事で、無駄な緊張感から解放され、平常を保ち、安心感を得ているのではないのでしょうか。五郎丸さんもあのポーズを取ることで心を落ち着け、雑念を払い、ボールに集中できたのでしょね。知らんけど。

ところが、心の問題とは別次元。現実社会において変化はつきもの。思わぬ自然災害や事故、転勤などという問題は、突然やってきて私たちの生活に大きな変化を与えることとなります。企業にしても、発足当時の経営形態をいつまでも続けられるわけではないでしょう。時代のニーズに答えることも必要でしょうし、時の権力者に合わせることも必要かもしれません。帝国データバンクによると、2023年9月時点で山形県内の業歴100年以上の企業は907社。全体に占める老舗企業の割合(老舗出現率)は、5.18%で全国二位です。すごい!!一体どのくらい歴史のある企業が存在するのか、気になりますか。2020年6月100年企業レポート vol.12 山形編によると、創業TOP5第1位は伊藤鉄工(株)(全国18位)1189年(文治5年)創業。もともと鶴岡市大山の鋳物師で神社仏閣へ法具等を収められていたようですが、現在は電磁流量計や溶接型バタフライ弁、建設機械部品などを製造されています。1189年に何があったのかと言えば、奥州合戦が行われた年で、

源頼朝による武士政権が確立するころです。ビックリですね。ちなみに第2位は米沢の(有)西屋旅館および(有)東屋旅館の1312年創業になります。

今年、100周年を迎える県内企業は33社あり、東北地方では最も多い数なのだそうです(福島28社、宮城21社)。中には、山形市の菓子メーカー「でん六」。米沢牛の生産小売りの「米沢佐藤畜産」。寒河江市の加工用果物卸の「角田商事」があります。ちなみに、300年の節目を迎えるのが享保9年創業の鶴岡市の酒蔵「奥羽自慢」だそうです。本業を大事に守ってこられた企業もあれば、異業種転換に成功しているところもあるようです。ただ間違いなく言えることは、創業当時と全く同じ事をしているわけではないということでしょう。本業を大事にしておられる所でも、何かしら新しい商品の開発や、製造方法の見直し、あるいは販売ルートの改革など、努力を重ねてこそその老舗企業なのです。



館長の独り言

5/24 山形新聞 談話室より
問題 売り手はいるが買い手はいないものとは?

答え 「恩」

故なだいなだ氏の言葉。恩を売るとは言うが、恩を買うとは言わない。ただ「恩は売るべきものにあらず」という日本人独特?の教えがあるように、恩を売ってやろうと考えると、自分は計算高い人間と思われるし、他人が誰かに恩を売っている様子がわかると、尊敬する気分になれないものです。

6月からの定額減税による減税額を給与明細に記載するよう企業に義務づけるというお国の考えは、あまりに恩きせがましいと思いませんか。